



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	滞欧通信 ドイツ農業の方向
Author(s)	矢島, 武
Citation	季刊農業経営研究, 1, 2-4
Issue Date	1955-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/36234
Type	departmental bulletin paper
File Information	1_2-4.pdf



滞 欧 通 信 一

I

1913年、すなわち、第1次ヨーロッパ大戦の直前には、ドイツは3,480万ヘクタール(1ヘクタールは約1町歩)の農用地をもつていた。人口6,500万に対し、1人当り約50アールである。1937年、第2次大戦前には、なお2,850万ヘクタールの農用地があつた。しかるに、1849年には四つの占領地区を合わせても2,120万ヘクタールに減つたのである。西ドイツだけでは農用地面積は、1,400万ヘクタール、人口1人当り29アールに減少した。

戦前にはドイツ国民の食糧の80%は自給され、あとの20%が輸入されていた。今日では60%の自給しかできない。これを少くも70~80%の線までもつて行くことが強く望まれている。

一方、敗戦までのドイツ農業は、大農場のある東独はもとより、全体としても、労働力の不足に悩んでいたのである。しかるに、いまやドイツは人口過剰なのである。西ベルリンでも10人に3人は失業者だといわれている。この過剰人口を帰農させることが現実の問題になつていゝる。都市における労働の機会も容易に増加せず、また住宅も不足しているのであるから、帰農によつて都市の問題も解決しようとするのである。換言すれば、従来的人口不足が土地不足に變つたわけだ。

しかし、以上のような事情であるから、問題は単に多くの人に土地を与えることではなく、農地そのものの生産力を高める必要があるわけである。そしてこの生産力の向上のため凡ゆる手段を構すべきであると強く主張されている。この帰農問題は単なる経済政策ではなく、社会政策であるという認識が支配的であるが、しかも、最善の社会政策は生産政策であるというこ

・農業経営研究編集同人・ <a・b・c順>

足羽進三郎	…	…	北海道大学農学部助教授
荒田 善之	…	…	北海道農業会議幹事
千葉 燎郎	…	…	農林省農業綜合研究所道研究員
深瀬 清	…	…	北海道立農業研究所資料科長
堀口 逸雄	…	…	農林省道農業試験場経営部長
堀越 義雄	…	…	帝国製麻株式会社取締役
石井 城夫	…	…	北海道農務部改良課長
和泉庫四郎	…	…	鳥取大学農学部講師
今河 英男	…	…	弘前大学農学部助教授
市川 忠次	…	…	北海道農地開拓部長
泉 当夫	…	…	北海道農業協組中央会参事
河辺敬太郎	…	…	日本甜菜糖株式会社取締役
工藤 元	…	…	帯広畜産大学教授
工藤 忠良	…	…	北海道生産農協連合会参事
川村 琢	…	…	北海道大学農学部講師
桃野作次郎	…	…	北海道大学農学部講師
西村 正一	…	…	帯広畜産大学講師
大谷 省三	…	…	東京農工大学教授
大爺 栄一	…	…	北海道大学経済学部助教授
斎藤 仁	…	…	農林省農業綜合研究所道研究員
崎浦 誠治	…	…	北海道立農業研究所研究科長
島内 満男	…	…	道立北海道農業試験場経営部長
高倉新一郎	…	…	北海道大学経済学部教授
高島 正彦	…	…	北海道大学農学部助教授
渡辺以知四郎	…	…	道立北海道農業研究所長
吉田 博	…	…	北海道農務部農政課長
湯沢 誠	…	…	農林省農業綜合研究所道研究員
矢島 武	…	…	北海道大学農学部教授

監 修・矢島 武・編集兼発行人・桃野作次郎
製 作・川崎 奎・刊行発売元・川崎書店新社
札幌市北3条西1丁目南向・振替小樽12677番

ドイツ農業の方向 — 矢 島 武

と、分配問題の解決は、結局、分配に供しうる量で決定的に左右されるという考え方である。

これは要するに、農業の集約化ということになるのだが、それも農業の機械化などで省力的な経営を作るのを第一義とするものではなく、むしろ労働の集約化なのである。もとより労働の集約化に農地がリスponsするような条件を与えねばならぬのはいうまでもない。何れにせよ、これは人口過剰で資本不足というドイツの現在並びに将来の状態に照応して、農業がとらねばならぬ姿であろう。労賃と利子の相対的な価格動向をみても、凡ゆる農業部門で、かかる労働集約化の方向が、経営経済的な費用の考慮からもとられると思われる。

もとより、反当投下労働量をふやしてゆけば、いわゆる収益増加漸減の法則が働き、おそかれ早かれ、労働集約化の限界にくることはいうまでもない。しかし、これは経営方式を一定にしておいた場合で、方式を変えることによって、この法則を回避できる。まず、作目の転換が労働集約化と結びつく。いま、ドイツで具体的に考えられている方向は、**藪耕作物 (Hackfrüchte)** と有畜経営 (**Viehwirtschaft**) の強化であつて、これはかつて私も紹介したところである。(拙著：酪農と農業経営 P. 99) そしてドイツの農地は一般に、かかる方式の転換に応じうる容量 (キャパシティ) をもつものであることは確認されている。

II

ハンブルク大学のノイリンク (Willy Neuling, Neue Deutsche Agrarpolitik, Tübingen, 1949, S. 173~174) は、ドイツ農業の将来の方向に対し六つの原則を提示している。すなわち

- 1 価値の高い藪耕作物の比重を高めること。

- 2 労働集約的な乳牛その他第2次的生産部門の比重を高めること。

- 3 農業の集約化を促進するような価格体系をたてること。

- 4 農地化しうる林地を農地化すること。

- 5 農業協同組合、改良相談所などの強化。

- 6 濃厚飼料 (穀物)、油料作物の如き農業基礎資料の輸入の適正化。

これである。以上の諸点を中心にやや具体的な説明を加えよう。まず、

有畜経営の強化が要求されているのであるが、その基礎をなすのは、いうまでもなく飼料問題である。そしてこれの解決は藪耕作物、飼料作付面積を増加し、かつ収量の最も高い品種を作付けることが根柢になる。家畜が増加し、そしてまた能力が高まつた家畜は、耕地に施肥を増すことによつてふえた費用を十分カバーできるし、労賃、農具等の支出増加も十分ペイしうる。

藪耕作物のうちで最も重要なのは馬鈴薯であるが、これは集約化によくリスponsし、追加的投資をよくペイする。重い埴土地帯そして気候的にも適したところでは、馬鈴薯、飼料ビートをへらして甜菜がふえる。甜菜の飼料価値については、ここに喋々する必要はあるまい。甜菜は労働集約作物であるが労働のピークをこわすことができ、秋の労働のピークも最近の收穫方法の改善で下げることができるようになった。

ところで、藪耕作物は土壤を一方的に負荷することになるので、これとの均衡上、飼料作物の強化が同時に必要になつてくるのである。地方によつては青刈飼料も作付ける。

ハレ (H. Halle, Großbetrieb und Kleinbetrieb, Haunover, 1946) は、「有畜農業と藪耕

作物の栽培は互に最も強い競合関係にたつ」といつているが、これはそのまま、うけとるわけにゆかぬ。まず、これは、青刈飼料とヘイを強度に要求する肉牛の場合のみあてはまるので、豚の場合はそうでない。第二に舎飼の場合の飼料にルーサン、クロバーなどを与えることによって、この隘路はさらに著しく下げることができる。第三に、濃厚飼料（穀物）の輸入は、集約化した有畜経営において、直ちに耨耕作物を作る余地を与えるからである。

次に価格関係であるが、これを適正化することによつて、ライ麦、甜菜および油粕とバター——大麦、馬鈴薯、玉蜀黍と豚——小麦と鶏卵といった系列が経営内部で常に回転できるようにならねばならぬ。そのため、まず必要なのは肥料価格を下げることで、そして従来、有畜経営に不利な条件をなしていた高い労賃、建物費などを安くすることである。

次に林地の農地化問題であるが、ドイツでは農用地たりうところに森林が沢山ある。ちなみに西ドイツにおける林地の面積は、6,946,600ヘクタール（1950年）であるが、未墾の荒地は246,400ヘクタールにすぎない。かつてエレボーム、メクレンブルクに関し、「森林の大部分は本来的小麦土壌にある」ことを指摘している（Aeveboe, F, Agrarpolitik, Berlin, 1928, S. 200）。また1924年のアメリカのドイツ農業関係調査委員会の報告にも、「穀物生産に極めて適している土地に森林がある」ことを指摘している（Die Erzeugungs und Absatzverhältnisse der deutschen Vieh- und Milchwirtschaft- Bericht einer amerikanischen Studien Kommission, Berlin, 1929, S. 126）。これがいま現実の問題となつてい

る。有畜農業のうちでも、まず、あらゆる努力を傾注しなければならぬのは乳牛飼育である。1931年の全ドイツの検定牛（検定組合）の平均年乳量は1頭当り3,750キロで、非検定牛全部の平均より1,500キロ高かつたのであるが、1939年には2,678キロにおち、非検定牛平均よりわずか388キロ多かつただけだ。多くの地方、特に、西ドイツ、南ドイツでは検定牛の方が、成績が悪かつたという。シュレスヴィヒ、ホルスタイン牛乳経営組合（これにはハンブルクとハンノーバーの一部もはいつている）では、1939年の牛乳年出荷量1,225,000トンであり、1944年には、ややおちて、1,149,000トンであつたが、1946年には、牛の数は7%の減少なのだが、乳量は800,000トンにおちた。ヘッセンでは、1946年の乳牛1頭当りの生産量は1939年に比較し33%おち、1948年6月までの成績では60%おちている。これは主として飼料不足と管理の粗放化によるものである。かかる乳量の低下では、すでに農業経営としてなりたたない。経営としてなりたつための経済限界源に達する必要がある。（拙著前掲書 P. 174）

ヴェルマン（E. Welmann Die Veredlungs Wirtschaft, Berlin, 1933, S. 44 ff）によると、年牛乳生産量が、2,000乃至2,500キロのものは、まだ収益線以下だという。それは固定費、ことに維持飼料費、それに労賃、建物費、器具費などが、かかる低い乳量では、その比重が高くなりすぎるからである。少くも乳牛1頭当り生産量が、4,000キロから5,000キロにならねばならぬ。これを実現するのが先決問題である。そして、そのためには、まず、飼料作を確実なものにしなければならぬのである。

（1955. 8. 6 ベルリンの宿舎にて）